
立命館中学校における 沖縄平和研修から見えるもの

— 現地研修型平和教育実践の意義と課題 —

小杉 真之

立命館中学校・高等学校社会科教諭

1. はじめに

立命館中学校では、2011年度の中学2年生から、2泊3日の沖縄平和研修を行っており、コロナ禍のため実施できなかった昨年度を除いて9回実施されている。そのうち、筆者は、2016年度・2018年度に主担当としてたずさわった。また、今年度2021年度も学年主任として事前・事後の指導と現地での引率指導を統括する予定である。

本稿では、過去2度の実践をふまえて感じた、沖縄で平和学習を行ううえでの問題点や新たな可能性について述べたい。

2. 2016年度・2018年度の沖縄研修の概要

2016年度の研修は2017年2月16日（木）～18日（土）に、2018年度は2019年2月15日（金）～17日（日）に実施した。なお、筆者は、2016年度はクラス担任かつ社会科教員として宿泊行事の主担当を務め、2018年度は学年主任かつ社会科教員としてこの行事を統括した。

学年の構成は2つの年度とも共通している。付属の立命館小学校から入学した生徒が4クラス、中学受験で入学した生徒が4クラスであるが、それぞれの「出身母体のかたまり」のなかで、将来的に他大学受験を志向するカリキュラムで学ぶ「特進クラス」にあたるものが2クラスずつある。その

ため1つの学年のなかに4つの「コース」が存在していた。生徒たちは、中学3年生に進級する際に、立命館高校から立命館大学へ内部推薦で進学していくことを前提とするコースと、他大学受験を前提とするコースのいずれかに、本人の希望と成績資格によって分かれることになっている。この構成は、2010年度に立命館小学校からの入学生を迎えるようになってから細部の違いはあるものの基本的に同一であった。なお、今年度2021年度に沖縄研修に行く現中学2年生からは、入学時点で「立命館小学校からの入学者」と「中学受験からの入学者」が混ざる仕組みになっている。ただ、将来的に他大学受験を志向するカリキュラムで学ぶ「特進クラス」にあたるものは存在しているため、学年に2つの「コース」が存在している。

筆者がはじめて沖縄研修を担当した2016年度においては、学年の教員団の中で「生徒の中にあるコース間の壁」を問題視する声が強くあった。その打開策として、沖縄研修での3日間の行動を、クラスを解体・混成させた班で行わせることになった。そのことが平和学習にもたらした「影響」については後述するが、筆者にとっての2回目である2018年度も基本的にそれを踏襲した。なお、筆者が関与していない他の年度は、基本的にクラスを単位とする行動をとらせている。また、筆者にとっての3回目となる今年度は、コース・クラスの構成が変わっていることもあり、過去2回とは異なる運営を行う予定であるが、それについては後述する。

筆者が担当した以外の年度では、年度によって若干の差異はあるが、3日間の行程は以下の通りだった。

1日目 14時頃に那覇空港に到着、ひめゆり資料館・平和祈念資料館を見学、那覇市内の宿舎に入り戦争体験者による講話。

2日目 バスで読谷村に北上してチビチリガマ・シムクガマの見学（現地ガイドの説明付き）、さらに北上して美ら海水族館の見学、バスで那覇市に戻る。

3日目 国際通りなど那覇市内などの自由観光、14時頃的那覇空港発の飛行機で帰阪。

筆者が担当した2016年度・2018年度は、前述した「クラスを解体・混成させた班で3日間行動させる」かたちに改変したうえで、以下で示す行程とした。

1日目 14時頃に那覇空港に到着、ひめゆり平和祈念資料館・沖縄県平和祈念資料館を見学、那覇市内の宿舎に入り戦争体験者の講話。

2日目 2日目の宿舎を恩納村に設定したうえで、丸一日を自由行動としてジャンボタクシーにて自分たちで調べて策定した見学スポットを回りながら、那覇市内の1日目宿舎から恩納村の2日目宿舎まで移動していく。

3日目 恩納村の宿舎からバスで南下し、読谷村でチビチリガマ・シムクガマの見学（現地ガイドの説明付き）、14時頃的那覇空港発の飛行機で帰阪。

1日目について。ひめゆり平和祈念資料館と沖縄県平和祈念資料館は、いわゆる「テレコ」のかたちをとって人数を半分ずつにして、生徒用しおりに入れ込んだワークシートに記入をさせつつ見学させた。沖縄県平和祈念資料館は「平和の礎」周辺の見学も込みである。平和講話は、2回とも大西正子さん（終戦時に13歳であられた）に約50分間のお話をうかがった。

2日目について。筆者が沖縄研修を担当するにあ

たって、とにかく生徒に実見・体感させたかったことは、米軍基地が圧倒的なスケールで沖縄に存在している様子であった。そのため、2日目の自由行動の計画を生徒に策定させるにあたって、「佐喜真美術館」「嘉数高台公園」「道の駅かでな」のいずれかを必ず行程に組み込ませたうえで、9時頃から17時頃までの間で、沖縄の「歴史・文化」「自然・環境」を学ぶための他のスポットも回る計画を立てさせた。

3日目について。中に入らないチビチリガマ、中に入るシムクガマともに、一度に集められる人数は80人程度が限界である。本校の一学年は240人規模であるので、座喜味城を見学する場所に加えて、学年を80人規模の3グループに分けて「ローテーション」させるかたちをとった。

3. 本校の研修旅行を通してみえた平和教育の実践上の課題

(1) 実体験を聞くことの教育効果および政治的中立性について

2016年度・2018年度の研修旅行の引率を通じて、平和教育を実践していくうえでの課題としてうきばりになったと感じることがいくつかある。

戦争を実体験された方の講話は、やはり圧倒的な力を持っていた。日頃に学内外で行う外部講師から話をお聞きする機会では、私語や居眠りの指導に神経を割かねばならないことが多い。過去2回の沖縄研修では、生徒は「畳敷きの大広間に三角座りで50分間」だったので、より集中力が削がれやすい環境であった。しかし、2回とも生徒たちは大西正子さんのお話をこれ以上ない態度で聞いていた。これは、生徒たちが、戦争を実体験された方のお話が持つ圧倒的な迫力を感じ取ったからに他ならない。ただ、それだけに、平和学習における「キラコンテンツ」「四番打者」が抜けてしまわざるをえない事態が訪れたときに、それを何によって埋められるのだろうかとも強く感じた。もちろん、映像のかたちで保存する、次世代の語り部を育成するなどの努

力が行われていることは承知しているが、ライブの迫力には敵わないのではないか。

また、お話しいただく方の「政治的党派性」はどのように考えるべきなのか。他の引率教員のなかで「ガマで起きたことの説明ではなく、米軍基地が沖縄に強いている負担のことばかり話されていて違和感があった」という人がいた。付言すると、その教員は沖縄に米軍基地が集中していることに否定的な見解を持つ者である。沖縄基地問題が、沖縄戦の帰結の一つであることは間違いないことである。また、戦争は政治の帰結として起きてしまうことであるから、戦争について考え語ることが現実の政治から完全に中立であることも不可能である。本校は「平和と民主主義」を掲げる私学の立命館なので、私も自分の政治的見解をあまり隠さずに授業を行ってあげたいことであるが、公立の先生などはとくにこの近年苦勞されていることだろう。筆者が関わった2度の沖縄研修について、研修内容についての保護者からのクレームに接したことはない。ただ、日常の授業内容に関してはクレームに接したことがあって、沖縄での平和学習についても今後には起こるかもしれない。個人的には、いろんな価値観にふれるべきだと考えるので、現地のスピーカーの方には自由に話をさせていただくべきと考える。ただ、政治がからむことは教員団間でも一枚岩となってクレームに当たりにくくなりがちであり、お話しいただく内容について学校が事前に打ち合わせをしておくことは必要だと感じた。

(2) 基地問題について考えさせるための「教材」について

基地問題を現地で考えさせることについても課題を感じた。「佐喜真美術館」「嘉数高台公園」「道の駅かでな」を訪れさせることで、基地の圧倒的なスケールを体感させることは可能である。ただ、当然のことではあるが、軍事施設である基地はこちらの自由に見ることはできない。「嘉数高台公園」から見るオスプレイが並ぶ様子は非常に興味深いが、やはり米軍からして見られてもかまわない景色にすぎ

ない。沖縄に行った、ものすごく大きな基地を見た、軍用機が飛んでいるのを見た、終わり、にならないためにどうすればいいのか。まさに「管見の限り」なのであるが、那覇市と読谷村の間の沖縄本島中部地域において、「佐喜真美術館」「嘉数高台公園」「道の駅かでな」の3か所以外で、米軍基地問題について考えさせることのできる場所を探し続けているのだが、見つけることができないままである（「北部訓練場」「辺野古」などの「ニュースの現場」の存在は承知しているが、地理的・時間的制約から現実的な訪問先にするには不可能であろう）。NHKの番組（2017年9月放送「沖縄と核」）でとりあげられたこともある「核ミサイル発射場」（恩納村・現創価学会研修道場）も、個人的に訪問してみたことがあるのだが、中学生が訪問する場所としては「わかりやすさ」の面であまり適していないと思われた。中学生の修学旅行なので、「わかりやすさ」「安全性」の二本柱が両立する場所である必要があり、「教材」に適した新たな場所の「発掘」は容易ではないと考える。

その意味で筆者が関心を持つのは、基地問題について必ず言われる「基地がなくなると困る人がいる」という言説である。可能であればおこなってみたいのが、「米軍基地の存在によって日常生活で被害を訴えている人」「米軍基地の存在によって生活が成り立っている人」それぞれのお話を生徒がじかに聞ける機会を、事前学習に十分に組みませたうえで、つくることである。そのことと「基地の圧倒的なスケール」を実際に見ることとを組み合わせれば、沖縄の基地問題を立体的にとらえることができるのではないかと考える。

(3) 平和学習と「観光」とのあるべき関係について

「通常の修学旅行の要素」と、「平和研修」のバランスをどうとるか、という問題である。筆者は、「観光要素」も、平和学習において重要であると考え。それは、沖縄戦などの「歴史」や、基地問題などの「現在」は、沖縄の地理的・自然的条件と密接不可分なのだから、沖縄の地理的・自然的条件を

体感するための「観光」も必要だと考えるからである。そのような、修学旅行における「平和研修」の部分と、「観光」の部分の意味のあるかたちで結びつけるという点において、筆者が関わった2回の沖縄研修における「班別タクシー研修・自由行動」は、積極的意義があったと自負している。

この「班別タクシー研修・自由行動」は、前述のとおり、「クラスを解体・混成させた班」によって行った。これにはメリット・デメリットがあるが、長所としては、あえて日頃打ち解けた関係にない者どうして班を編成したことにより、平和学習の部分はもちろん、文化や自然を学ぶ部分でも、「遊び」「楽しみ」のみに流されない雰囲気を持てたことがある。班の編成にあたっては、沖縄で何を学びたいかを問うアンケートをとり、それを主な材料としたため、日頃打ち解けた関係ではないものの沖縄で学びたいことの指向性は近い者どうしが集まっている。訪問先の選定に際しては、「戦争・平和」「文化・歴史」「自然・環境」の3つのテーマについて、訪れる場所を各人が調べつつ班のなかで話し合って定め、定めた後にさらに深く調べるという準備をさせた。「戦争・平和」について訪れる場所は、先述のとおり、「佐喜真美術館」「嘉数高台公園」「道の駅かでな」の3か所から選択させた。生徒たちはやはり「観光」がしたいので、「戦争・平和」について訪れる場所は「義務」とされている1か所だけの班が大半であったが、なかには、南部に少し足をのばして「旧海軍司令部壕跡」「陸軍病院南風原壕」を自分たちで見つけて訪問した班もあった。また、「文化・歴史」「自然・環境」でも、今帰仁城の見学や製塩体験などを自分たちで見つけて組み込んだ班もあった。このように、生徒たちに一定の裁量を認めて訪問場所を選ばせたので、事前学習への生徒のモチベーションも高く、現地での取り組みも総じて意欲的であった。

4. 課題克服に向けて——2021年度の沖縄平和研修に向けて——

今年度の沖縄研修は、過去2回と同様に、生徒を8人程度の班に分ける予定である（ただし、クラスを混成した班にはせずに、クラス内で班を編成する）。そのうえで、班ごとの「リサーチクエスチョン」を設定させ、その班ごとのテーマから派生するかたちでの個人の間いを設定させる。たとえば、「沖縄の食文化」を班の共通のテーマとした場合、個人の間いを「ランチョンミートがどのように活用されているか」に設定するというようなかたちである。そして、事前学習を通じて問いとそれへの自分なりの回答をみがいていき、2月の研修本番がフィールドワークとなって、帰着後に「問い→考察→回答」を整理・アウトプットさせることを予定している。

テーマの設定は、学校行事や定期テストの関係などもあって11月頃に行わせるのであるが、その際にスムーズにテーマの設定を行うことができるよう、そこまでの各教科の指導のなかで、沖縄に関する知識・考え方のインプットや、「問いを立てる→考察する→回答を整理する」ことの訓練を行っていく。「沖縄に関する知識・考え方のインプット」は、社会科だけでなく、英語・国語・理科や音楽・家庭科・美術などでも可能である。また、「問いを立てる→考察する→回答を整理する」ことの訓練も事前学習の一環であることとらえることで、日常の学びのかなりの部分を有機的に関連付けて、2月の沖縄研修を迎えることが可能となる。

とはいえ、今年度の取り組みについては、いまだに準備もスタートしていない段階である。先述した過去2回の経験で得た反省をふまえ、今年度の研修が実り多いものになるよう努力していきたい。

※2022年2月17日（木）～19日（土）に予定されていた今年度の沖縄研修は、コロナ禍第6波の影響により、延期となった。延期の日程は未定である。